

## 花の力で元気を！



JA筑紫二日市支店前の花壇には、色とりどりの花が咲き誇り、利用者や支店の前を行き交う人々に元気を与えています。

同支店の職員は、新型コロナウイルスによるストレスを癒してほしいと、花の寄せ植えを企画。4月中旬にマリーゴールドやベゴニアなど5種類の花を植え、5月10日頃に満開を迎えました。

同支店の森木支店長は「毎年野菜を植えているが、こんな状況だからこそ今年は色とりどりの花を植えました。皆さんのストレスが少しでも和らぐと嬉しいです」と話しました。

## JA 筑紫の認知度向上を目指して



JA筑紫は、4月中旬からインターネット交流サイト（SNS）「インスタグラム」の運用を始めました。地域や地域外に住む若者や女性をメインターゲットとし、JA管内の農業や農畜産物などの魅力を発信します。

インスタグラムでは、利用者がJAを身近に感じてもらえるよう認知度向上を目指し、随時投稿。ゆめ畑のお得な情報や、管内の農畜産物、JAが発行するコミュニティ誌「comu（こみゅ）」を元に旬の農畜産物を使ったレシピなどを紹介します。

投稿の際には、若者や女性の利用者が多いというインスタグラムの特性を意識し、写真や #（ハッシュタグ）に工夫を凝らします。

企画管理部の井上部長は「JAの情報発信機能を強化するため、インスタグラムの導入に踏み切りました。多くの人にJA筑紫のことを知ってもらえると嬉しいです」と話しました。

## 健全な苗を丁寧に配送



JA筑紫の子会社（株）JAアグリサポート筑紫は、5月14日から水稻苗の配送を始めました。4月中旬からJA本店グラウンドで育てた苗を、配送員が1箱1箱丁寧にトラックへ積み込みました。初日は管内の中山間地を中心に、苗1457箱を組合員宅へ配送しました。

これは、生産者の作業負担軽減を図るため、毎年行っています。今年は約800戸の組合員から「夢つくし」「元気つくし」「ヒノヒカリ」合わせて約5万5000箱の予約注文がありました。6月下旬まで、苗を積んだトラックがグラウンドから出発し、組合員のもとに届けられます。

社員は「最後の配送を終えるまで、農家に喜ばれるように健全な苗を作っていきたいです」と話しました。

## はだか麦収穫ピーク



JA筑紫麦出荷者部会は15日から5月下旬まで、はだか麦の収穫を行っています。

JA管内では、45名の部会員がはだか麦や小麦を約320haを作付しています。11月中旬から3月までは気温が高めに推移しましたが、4月の低温により成熟期は平年並みとなりました。初日は、はだか麦約90tの収穫を行いました。

JAの担当職員は「本年産も順調に成熟期を迎えました。適期刈り取りを徹底し品質の維持に努めたいです。また刈り取り作業は安全第一に行ってほしいです」と話しました。

部会は、はだか麦「イチバンボシ」と小麦「チクゴイヰミ」を生産し、播種から刈り取りまでの作業工程の管理を徹底。高品質維持のため、研修会や視察、圃場巡回を重ね、部会の統一を図ります。

## 「夢つくし」田植え最盛



JA筑紫管内で、水稻の田植えが始まりました。JA管内の水稻作付面積は約692ha。「夢つくし」の栽培は、JA管内で3分の1を占めます。

5月20日には、中川幸治さんが筑紫野市平等寺で、40aの田植えを行いました。中川さんは「今年産も病害虫に注意し、品質の良い米を作りたいです」と意気込みました。

田植えは6月下旬までJA管内の各地区で行われ、肥培管理と病害虫対策の徹底で品質の向上に取り組みます。

## 直播栽培で作業負担軽減



筑紫野市の農事組合法人三水うまいちは、今年から水稲の乾田直播栽培の導入を本格的に始めました。

法人は約29haの圃場で、米、麦、大豆や白ネギなどを栽培。

乾田直播栽培は、耕した田に直接種もみをまくため、育苗作業が不要で、労働時間や作業、コストを削減した栽培ができると期待されています。昨年、法人の圃場30aで試験的に栽培しました。

今年は水稲栽培18.4haのうち約2.5haを乾田直播で行います。22日には、トラクターに播種機を取り付け、乾田で種もみの播種をしました。

法人代表理事の檜木明さんは「品質の良い米が作れるよう適切な栽培管理に努めていきたいです」と話しました。

## 第9期ちくし農業塾閉講式



JA筑紫は5月27日、JA営農センターで第9期ちくし農業塾閉講式を開きました。修了生9名は約11カ月に及ぶ講義と実習が終わり、今後はJA直売所出荷者や生産部会員の一人として活動する予定です。

式には、JA役職員ら8名が参加。修了生には、修了証書と記念品の三角草削りが手渡されました。塾で講師を務める室園正敏さんは「積極的に野菜を栽培し、1日でも早く生産者の仲間入りができるよう頑張ってください」と修了生を激励しました。修了生は、「興味を持った品目に力を入れていきたいです」「直売所に出荷できるよう、学んだ知識と技術を生かしながら頑張りたいです」など、一人ひとり今後の決意を強く語りました。

JAは、新規就農者や農業後継者の育成を目的に2011年から農業塾を開講。露地野菜や施設園芸の栽培実習と講義を行っています。1期から8期までの修了生は77名。そのうち63名が直売所出荷者や生産部会員として活躍中です。

## 業務終了後の時間を使ってスキルアップ



ＪＡ筑紫筑紫野地区の支店では、共済や相続税などの知識向上を図るため、スキルアップ勉強会を開いています。

現在、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、営業時間の短縮や渉外活動の自粛、新任担当者の研修の延期が続いている中、時間を有効活用し、知識をさらに高め、収束後の業務に役立てようと企画しました。

講師には知識や経験があり、勉強会に対して意欲的な職員を選任。金融窓口担当や金融渉外担当などの職員を中心に、任意参加で行っています。

５月２５日には第４講目を開き、ＪＡ二日市支店で相続税の勉強会を行いました。支店長代理の木村康一郎さんが講師を務め、１０名の職員が参加しました。

今年度から新たに金融渉外担当になったＪＡ針摺支店係長の矢野宏さんは「とても勉強になります。これからは自分のスキルを高めるために参加していきたいです」と意気込みを語りました。

この勉強会を主催するＪＡ御笠支店係長の谷龍祐さんは「知識を増やして、多くの相談を受け、利用者の役に立てる喜びを感じてもらえると嬉しいです」と話しました。

勉強会は８月中旬まで行う予定です。

## 2020年産大豆播種前講習会



ＪＡ筑紫は、ＪＡ物流センターで、２０２０年産大豆播種前講習会を開きました。７月から始まる大豆の播種を前に、生育管理について再確認。作付面積４６haと、昨年より５．５ha増やし、反収２００kgを目指します。

講習会には、大豆生産者や普及指導センター、ＪＡ全農ふくれん、農業共済組合、ＪＡ役職員など２１名が参加。２０１９年産大豆の実績や大豆情勢について説明しました。参加者は真剣な表情で資料に目を通しながら、聴き入りました。

ＪＡの担当職員は「この講習会で生産者の意欲が高まりました。２０２０年産も高品質な大豆生産に努めたいです」と意気込んでいました。

## 小麦「チクゴイズミ」刈り取りスタート



JA筑紫管内では小麦「チクゴイズミ」の刈り取りが5月30日から始まりました。

JA麦出荷者部会員は小麦約174haを作付けしています。

今年の小麦は暖冬の影響で例年より4～5日早い刈り取り作業となりましたが、順調に生育し品質は上々の出来です。

筑紫野市阿志岐で小麦約19haを栽培する農事組合法人あしきは、初日に約8haを刈り取りました。法人代表理事の中原善幸さんは「1等Aランクを目指しながら、刈り取り終了まで安全に作業を行っていきたいです」と話しました。